

自由教育と自治教会

志 賀 英 雄

「自由教育と自治教会」という言葉は、新島襄先生が明治二十二年十一月二十三日付けで、横田安止生徒に宛てた書簡の中に記されたものであつて、「この両者が併び行はれること」が、先ず畢生の事業の窮極目的であることを、明確に指示されたものとして注目したい。先生は同志社の本質目的が、新しい西洋の学問の教授とともに、キリスト教の福音の宣教にあることを、特に自由と自治の精神のもとに行われるべきことを、この簡潔な言葉でもって表現されたのである。このことは同志社英学校が明治八年十一月二十九日に開校されるや、早くもその翌年の十二月三日に、「同志社教会」の前身である「西京第二公会」を、先生が仮牧師となつて設立されたことで明白であらう。

先生は同志社に学ぶ生徒が、学問と宗教の二つの眞實な眞理の探求に向かうべきことを指示されたのである。これは新島襄の思想と信仰とを支配する二つの世界觀の價値の理念の自覚によるものであつた。つまり生徒の人間性はこの二つの眞理によつて、その美しき完成をとげるであらう、という先生の高邁な教育的自覚によつて貫かれた信念であつたのである。したがつて同志社教会は、横村京都府知事によつて学校内で説かれることが禁止されていたイエスの福音を求める唯一の場として、教職員と生徒を主

体とする学校教会として発足した。そしてこの性格は海老名総長の時代の「同志社教会規約改正」（大正十年十一月四日）のときまでの約四十五年間続いた。この規約の改正は、主イエスの福音を学校関係者のみが占有すべきではなく、これを一般市民に開放することが、教会の本質的使命であるとの見解に立つての措置であつた。

ここで、私は新島先生と同じように、米国で学び、受洗して帰国、一つの教会と一つの女学校を設立した沢山保羅先生のことを想起する。すなわち、沢山が明治十年一月二十日に浪花公会を設立し、その翌年の十一月七日に教会立学校として、梅花女学校を創立したが、それは新島の場合と全く逆である。先生の構想は眞正の文化の興隆は、眞正の教育の振興によるのはかはないとの確信に基づき、斬新なる西洋の学問を教授する眞理の殿堂としての学校の創立が第一目的であり、主イエス・キリストの福音の伝道のための教会の設立が第二目的であつた。これは教会が学校を経営し、これを精神的に支配するという沢山の構想とは対立する。教育の本質に属する自由、それは眞理による自由であり、眞理への自由であつて、この自由は学問の自由によつて体系づけられないければならない。そしてその学問の自由の最高の殿堂が大学であ

る。先生の最終目的はこの大学の創立にあった。そしてこの立学の精神は教会設立構想に優先し、学校が教会の支配をうけることなく、学問の自律性を確立することによって完成するであろう、というのが新島の構想であつたように私は解釈する。

ところが、「新島自身、教育が主であつて伝道が従であるという考えに立つて行動していたとは思えない。」と語る論者がある。新島牧師が新島校長に優先したという見解である。しかし私はこの見解に同調することはできない。もちろん、先生は同志社教育の理念の自覚において、学問と宗教を分離して考えることをされなかつた。キリスト教主義大学の設立が先生の壮図であつたからである。しかし、キリスト教が常に学問に優先するとは考えられなかつた。私は解する。同志社教会を設立されたあと、先生は大学の創立にその生涯をかけられたことで明白ではないか。そのための先生の壮図の内容は「同志社大学設立の旨意」、の中にのべ尽くされている。「自由は予が活ける標語である」という先生の言葉のアクセントは、まず教育の自由にあつたと考える。そしてこの自由なしには学問の自由、したがって大学の自由は成立しないのである。

ところで、新島の事業が自由教育だけに終始していたのではないことは、教会の設立によって明白である。しかしそれはどこまでも自治教会でなければならぬ。この自治の理念は、福音の真理が自由で説かれるべき教会を指すと同時に、教会の運営における自治権をも意味する。先生が「自治教会」ということを強く主張されたのは、明治二十二年五月に、東京で一致教会と組合教会との合同の議が計られたとき、教会の運営は民主的理念に基づい

て行なわれるべきものであつて、階級的・貴族的な教会行政を行なう一致教会との合同により、組合教会の自治権が失われることを怖れ、これに強く反対されたことに拘わりをもつ。このように自由の原則のもとに、教育と教会の使命が並び行なわれて、各々その本質を生かすことに同志社教育の特質がある。

このような新島の価値観は、独立・自尊を標語として国家に追随しない学問の自由の殿堂として、慶応義塾を創立した福沢諭吉のそれを越えている。新島は福沢が拒否したキリスト教的真理を、を教育理念の一つの基調としたからである。また新島には教会の組織を拒否して、柏木に集合所を設け、聖書講義をもつて多くの優秀なる弟子たちを、キリスト教界に送つた無教会主義の内村鑑三のなしえなかつた大学の創立がある。大学と教会という二つの真理の殿堂を設立した新島襄は、この二人の偉大な明治人の業績を越えていると言つてよいであらう。

このようにして、同志社は一〇三年の輝かしい、しかし苦難にみちた事業の足跡を、わが国の私学史に残してきた。また、それに平行して同志社教会も常に大学に即して、日本組合教会の母教会として、小崎、金森、原田、海老名、宮川、柏木、堀ほか多数の優秀なる牧師を育て、安中、東京第一基督教会、岡山、今治、彦根のほか多数の教会を各地に設立し、日本キリスト教会史に栄光の足跡を残してきた。同志社大学と同志社女子大学とを頂点とする同志社教育と同志社教会、この二つの真理の殿堂の深奥に、新島襄が点じた栄光の灯が、永遠に消えざることなく、燃えつづけてゆくことを、私は本年三月末日をもって深い愛惜の念を懐きつつ、同志社を去る者として衷心から願わずにはいられないのである。

(同志社大学文学部教授)
(同志社教会史編集委員長)

新聞經營と広告

——新聞広告史の方法論を模索して——

吉 田 曠 二

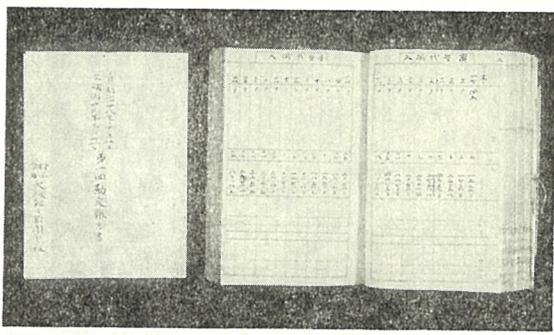
東京大学法学部に有名な明治新聞雑誌文庫がある。同文庫の創設は今年から数えて五十二年前の昭和二年で、創設者は明治文化の研究者として著名な宮武外骨(半狂堂)氏。それに広告取次業、博報堂の創始者瀬木博尚氏が浄財を基金として提供し設立したので、今日では新聞約一、八〇〇種、雑誌約五、七〇〇種ほか明治



「新聞総覧」明治43年版 日本電報通信社刊。この書は当時の新聞広告界の動きや各紙の広告掲載量などを紹介している

・大正期のおびただしい貴重な文献類が集められている。創設のエピソードは博報堂の創始者瀬木氏が広告取次業として書籍広告を扱い、その結果驚くほど巨額の富を貯えたから、その富を社会に還元するために、新聞や雑誌、出版文化研究の発展に寄与する公共機関に提供したという話である。瀬木氏の行為は産学共同路線の原型として興味があるが、そのねらいは軍事産業に寄与する科学の研究や特定の資本に奉仕する研究に投資したわけではなく、純粋に文化史的な資料の宝庫をつくりたいと念願したわけで、同文庫の創設はいわば理想に近い産学共同の産物であったといえるはずだ。

筆者は一昨年の秋、同文庫が貴重な門外不出の新聞コレクション数百点を創立五十周年の記念に展示するというので、会場の東京大丸へ出向いてみた。その時、会場には幕末から明治・大正にかけて発行された新聞・雑誌、にしき絵がところ狭しと展示されており、みるほどに近代日本の歴史のあゆみと失敗をかさねながらも権力に屈しない言論機関の活動と新聞人のたゆみないエネルギーのほとばしりをみる思いがした。



明治28年 村山合名 朝日新聞会社「第一回勘定報告書」(左)と明治10年代の大福帳(右, 同社社史編修室所蔵) 貴重な経営資料の一つで発行部数, 総収入販売収入広告収入などが記入されている。

西洋の諺に「ローマは一日にして成らず」といわれているが、新聞の歴史も一日にして成らずである。明治以来、かの悪名高い新聞紙条例やさんぼう律でいためつけられながら、したたかの根性で生きぬいてきた新聞人の生きざまが展示された資料の活字の中に映しだされている思いがした。

その頃すでに、筆者は社業の一環として近代日本の新聞について、広告と経営の関係を調査し、学問的に分析するための機会を与えられていた。調査と研究の期間は二年数カ月。大阪の朝日新聞社内や社外で毎月開催する新聞広告史の研究會に参加し、時には母校の同志社大学総合図書館や国立国会図書館、東大明治文庫へも資料の収集調査に向き、その他、社内での經理資料を含む老大なデータの中から、新聞経営の中で広告がはたす役割

りをどのように分析すればよいのかについて学問的な方法論を模索し続けてきた。

新聞広告史の方法

その結果、探りだしえた新聞広告史研究の方法は経営史的視点から、新聞経営の発展に寄与する広告の役割りを分析することで、その対象は発行部数や広告の掲載量、広告の紙面比率などを数量的に分析する方法と広告取引、広告倫理、広告事例を抽出し、それらを統計的に分析したりあるいはまた歴史的意義を解釈したりする方法が考えられた(表1参照)。

そのうち新聞広告の掲載量(スペースの単位は行・段数)や発行部数の増減は新聞紙力の強弱を検討するために必要で、ねらいは発行部数の増加が広告掲載量の増加に結びつき、広告掲載量の



「大阪朝日」(明27.1.7付)広告付録 広告主は日本生命保険株式会社 広告コピーには保険狂言が入っている



「大阪朝日」(昭和2年7月15日付) 岩波文庫 第1回刊行書目の広告。

取引の問題は通常、広告主—代理店(広告取次店ともいう)—新聞社の間でかわされる商取引のことである。先に述べた博報堂が東京日本橋に誕生したのが明治二十八年のこと。すでに東京では空気堂組や内外用達会社などが創設され、大阪では万年社が明治二十三年に誕生していた。大都市を中心に大・小さまざまな代理店が設立され、以来、取引の仕方にも一定のルールが確立した。

増加は広告収入増と広告料の改訂につながり、結果的には広告収入の上昇で新聞経営を安定化させ、販売面では安定定価の新聞を読者に配達できるといふ図式を考証することであった。

また広告

そして基本的には発行部数が多くて商品購買力にめぐまれた読者層をもつ新聞が有利となり、広告料と割引率(代理店マージン)の関係は新聞社と代理店の力関係により変動を示すことになる。さらに広告倫理の問題は、歴史的には新聞紙条例などの諸規制と新聞社掲載責任論などとの関係で検討することが重要で、新聞社は一方で広告掲載上の責任を配慮し、他方、新聞紙条例に違反のないよう注意しながら広告掲載規程を規定し、新聞の発行を続けることができたのである。

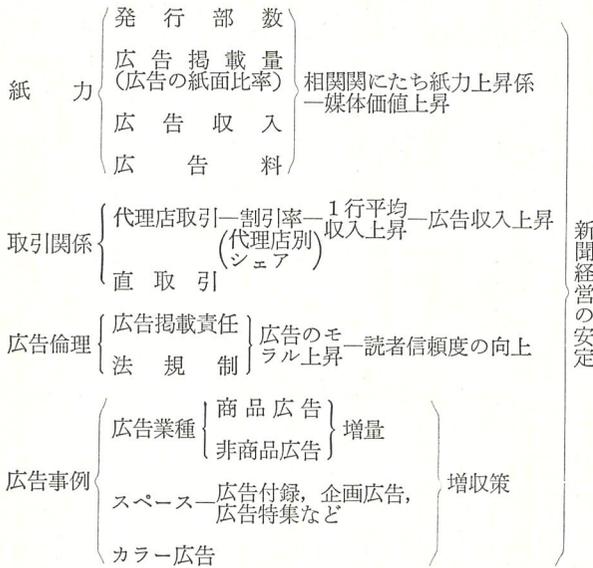
しかし新聞広告の歴史的発展をみる重要な対象は広告業種や広告事例の問題であらう。

そのうち広告業種は表Ⅱのように商品広告と非商品広告に大別されるが、商品広告の主流は明治以来、書籍と売薬で、ある時代は金融広告や化粧品広告、またある時は地元の百貨店や映画などが隆盛をきわめるといふ歴史をあゆんできた。しかしどのような業種の広告がいつ新聞広告の花型選手になるかは経済の好・不況や時代の風潮で大きく変化するのが特徴だらう。

一方、広告主の側からみれば、新聞広告はより多くの読者により強力なパンチで訴えかけることが大切で、新聞広告の歴史は一面でスペース拡大の歴史でもあったといわれよう。

すでに明治の十年代末以来、全ページ広告が東京大阪の有力紙に登場しているし、大正期にはエンサイクロペディア・ブリタニカの全ページ見開き広告も出現している。また、カラー広告、企画連合広告、記事広告、広告付録、広告特集などの紙面対策で新聞社の増収策が検討された。

表Ⅰ 新聞広告史の対象



新聞経営の安定

このようにみえてくると、新聞経営に占める広告の役割りは重要で、広告増収のための対策がさまざまに検討されてきたことがわかるし、広告収入は販売収入とともに、新聞経営の二本の柱として注目され、両者のバランスが経営の安定と発展に不可欠となるのは自然のなりゆきで、広告史の研究対象も両者の関係を時系列的にみる必要が要請されよう。

表Ⅱ 新聞広告の種類

種類	掲載範囲	全 国	地 元
商品広告		書籍(単行本・雑誌・教科書)	百貨店
		薬品(売薬)	映画・演劇
非商品広告		金融	不動産
		繊維	電 鉄
		化粧品	その他雑件
		運輸車輛	案 内
		機械・文具	
		その他	
非商品広告		官庁告知	
		政治広告(政談会告知・政党・選挙広告など)	
		宗教広告	
		決算広告	
		その他	

最後に新聞広告の経営史的研究について今後の課題を二、三提言しよう。
これまで新聞広告の経営史的研究は大学に席のある研究者の間でも、新聞社の社史編修室の仕事にたずさわる記者の間でもほと

経営史的研究の課題

らなどなされていない。

その理由の一つは新聞社側が企業秘密をまもる立場から、社外に経理データや経営分析資料の公表を拒否し続けてきたことによるが、今一つは歴史の研究者の間でも新聞広告の役割りを経営史的に分析する方法論が確立されなかったからであろう。

しかし新聞の歴史は記事を中心とした言論活動の面から分析することのほかに広告の面から経営史的に分析することが必要で、この面から日本の新聞の歴史の足跡を追求することが今後の新聞史家に課せられた研究課題の一つであろう。

今日、日本の有力紙は一日平均発行部数八百万とか七六〇万とか……を誇っているし、広告掲載段数も朝・夕刊を合わせ、月七、〇〇〇段（一ページ＝十五段×発行日数）の好記録をつくっている。

さらに新聞広告費として投入された予算総額は昨年の場合、全国で五、七〇二億円（対前年比一一・二・五％）にも達したと推定されている（株式会社電通の第一次推定による）。

このような状況下にある新聞広告界はやはり歴史的にその起源を探りだし、理想的な新聞経営のあり方は何かを広告を通じて分析することが今日的な課題である。

そのためには新聞広告史の学問的な方法論を確立し、社会学や社会思想史の方法論をもあわせ導入し、一面では広告事例の批判のほかにも新聞社の広告政策をも客観的・批判的に分析し、あるべき理想の新聞経営のあり方を求めて、学問的な新聞経営史論をつくりだす必要があるだろう。

（朝日新聞大阪本社広告局 広告管理部次長）



京 都 を 思 う

尹 聖 範

私は、一九一六年生れの韓国の学生として、一九三八年の春、同志社大学神学科選科に入學したものです。

中學卒業直前、肺病で療養生活を三、四年過したものですから選科を選ぶことを余儀なくされました。病床生活の中でもドイツ語や哲学書を読み続けた結果でもありませんが、入學試験には別に困難はなかったようでした。

日本の古都である京都は、私には非常に印象的でありました。相国寺と御所の中間に位する同志社は、この上なく私の散歩と瞑想の最適地であったと思います。

当時の神学科教授といえ、富森先生、大塚先生、有賀先生、魚木先生等でありましたし、外来講師としては京大からの波多野先生、高坂先生、田中先生（ラテン語）等でありました。

私が入學した頃にはすでにバルト神学が流行っていた時でしたが、同志社はバルト神学の紹介の先駆者でありました。同志社はバルト神学の研究に寄与をなしたものと思っています。これが結局私がバルト先生の下で勉強する一つの契機になったのではないかと思っております。

京都の生活で最も印象的に思い浮かべる事件は、私が友達の勅

誘によって柳宗悦先生の「朝鮮とその芸術」という本を読んだこととあります。一気に読破して翌日、奈良に行き、法隆寺を訪れました。本堂の壁画、百済観音、金堂の救世観音などを拝観し、涙なくしては見られ得ない興奮と感激をもって帰ってきたことを記憶しています。

近頃、柳先生の本が韓訳され、多くの人びとの読み物になっていますが、私が韓国に対する新しい目を醒ました一つの契機になったことは疑いのないこととあります。

私が、スイスのバーゼルで研究していたとき、ドイツのアンドレ・エックアルト博士の『朝鮮の芸術』(Andre Eckard: Die Koreanische Kunst)という大部作を読んだことは二度目の感激でありました。外国の人達によって自国の文化を知らせてもらったことを今も感謝しております。

同志社での三年間にうけた多くの講義は、私の神学や思想の発展に血となり、肉となったことはいまでもありませんが、ただ一つだけ私の脳裏から去らない講義があったことに触れたと思います。当時、某教会の牧師をしておられた講師が実践神学の時間につきぎのようにいわれました。すなわち、「自分は神を愛するこ

とができるが、自分の父は絶対に愛することができない」と。私にとつてはあまりにも意外な爆弾的宣言でありました。これは私の父母に対する不孝のせいでもありませんが、神学的にも重大な問題でありました。なぜならば、信仰と倫理の問題に関連する一つの矛盾を発見したからであります。

長い歳月が過ぎました。私は一九五六年にスイスのバーゼルから帰つて自国の思想的伝統や文化的遺産についての関心を注ごうと思つて檀君神話のごとき宗教的伝統に興味をもちはじめました。その結果、『韓国的神学』（別名『誠の神学』、『孝』などの著書を出しました。『孝』は幸いに米國ハーバード出身のM・カルトン博士によつて英訳が出ました。

某牧師の話が私の「孝」の出版の唯一の契機ではないのは勿論ですが、とにかく一つの契機ではなかるうかと今も思つております。

戦後、韓国も日本も、西欧式の教育一点ばかりで東洋の伝統的美徳は忘れられ、軍政当局もこれに対して何等の関心を示さなかつたことは遺憾千万なことであつたと思ひます。近頃の社会的な混乱は、このような道徳的、倫理的価値を中心とする教育を稀薄にした結果ではあるまいかと思つております。

近代化、西欧化、産業化、工業化も重要でありましようが、人間が真に人間になる教育がほしいのであります。個人主義的、合理主義的な考え方だけでは道徳的問題を解決し得ないことは明らかであります。

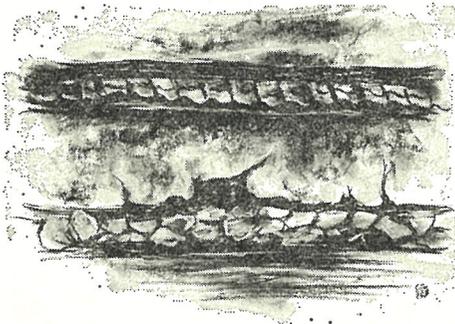
同志社創立百周年には、韓国の同志社卒業生たちが記念として

『高麗八万大藏經』（影印本）六〇余巻を同志社に献呈しました。これはわが国の同志社卒業生たちの母校を愛する心からの表現であります。今は同志社大学図書館の別室に置かれ、閲覧に供されている、との便りをいただきました。

同志社の無窮なる発展を祈りつつ。

（一九七九・一・一七日）

（筆者は、同志社大学を卒業後、バーゼル大学で神学博士の学位をうけ、現在ソウル監理教神学大学学長をつとめている。）



海外における日本語教育の現状
(1976年9月 国際交流基金調べ)

地 域	機関数	教員数	学習者数
ア ジ ア	305	757	194,000
大 洋 州	96	220	11,000
北 米	228	870	22,000
中 南 米	283	656	27,600
ヨーロッパ	78	310	5,000
中 近 東 ア フ リ カ	11	15	300
合 計	1,001	2,828	259,900

ここ数年、海外の日本語学習者が急速にふえてきている。以前はアメリカとかブラジルとか東アジアとか、わりに地域が限られていたが、今では、地球上のたいいていの地域で日本語学習が行われるようになった。また、地域ごと、国ごとの学習人口がふえて、学校や先生が足りないところも出ていっていると聞く。手もとにあ

日本語教育のひろまりとふかまり

— 海外における日本語教育 —

玉 村 文 郎

る一九七六年の集計表をここに紹介しよう。

この表の中の数値は、現在ではもつと大きくなるはずである。旧冬、東京と大阪で開かれた「第二回日本

語教育国際会議」の席での、上海復旦大学の蘇先生の「全中国の日本語学習者は百万人ぐらいだろう」との発言は、参会者を驚かせた。香港でも、一昨春のテレビ講座開設につづいて、昨年から理工学院が日本語を必須にしたことを現地で聞いた。フランスでは、一昨年日本語教育に関して二つの改革を行っている。大学入學資格試験科目の日本語の第一外国語化と、テレビ日本語講座の開設である。担当のオリガス教授は、学生の急増とテレビ講座への人気殺到に悲鳴をあげていられた。

このように、学習者の急増には教育制度の改革や教育方法・手段の拡大などが先行しているのであるが、そういう改革や拡大は、一般の日本語熱を反映しているわけであるから、多くの地域で日本語への関心が高まってきたというのが、現状の特徴であろう。

このような日本語習熟をもたらしたものはなんだろうか。率直に言って、①就職・昇給などの機会を得るための日本語習得②科学技術の吸収手段としての日本語の利用 ③日本の文化文明を解明するための日本語学習の三類に分けられるであろう。もちろん三類は相互に関連するものであるが、①がアジア的傾向であ

り、③が欧米的傾向であると従来は見られてきた。それが近年入り乱れるようになり、全体として②が多くなってきているようである。「日本学」は欧米のものという在来の観念は、いまや改められるべき時機になったのである。

ところで、近年のこのような学習者の増大は、各地の長い伝統的な教育の制度や方法にいやおうなく改革を迫ることとなり、また教員の質的向上を促すようにもなっている。一昔前までは、日本人であれば、大学出であれば、簡単に日本語の先生として迎えられるということがあったが、いまは、そういうところは急減し、専門家を望むところが多い。来日留学生にも、まったくの日本語知らずは珍しくなり、本国での日本語教育の浸透のようすがうかがえる。また、日本で日本語学・日本語教育・日本学を専攻した留学生が、徐々に帰国して教壇に立つようになり、マスターになって帰る者も出てきて、全般的に海外各地の教育も充実の度を加えてきている。

しかし、教員養成の面での日本側の立ちおくれは否定できない。いま早急に対応を迫られているという状態である。各種の教材・教具の不備もよく指摘される。主教材である教科書も点数が限られ、英語国民用のものを除けば、対照言語学的な分析を経て編集されたすぐれたものは、皆無に近い状態である。学習者にとって欠かせない対訳辞書の場合はもっと深刻である。英米でも例外ではない。ヌレイという形容詞一つをとってみても、十全な意義説明・例文などを記載している辞書はない。教科書不足の声は、各機関が自主的に作れるまでになっていないから出てくるのであ

るが、辞書の不備は専門学者の責任であろう。ともあれ、多様な各地の要望に即刻・全面的に応えるのはむずかしいことであるが、日本の政府・大学・研究者の側でなすべきことはあまりにも多い。それにしても、教育はやはり「人」のいとなみである。海外で日本語教育に従事する人の資格・資質はもっとも論じられるべきであるとおもう。一昨春、東南アジアへ現職者研修のために出向いて、日本で感じていた「人」の問題を一層つよく感じさせられた。教材がない、テープがない、辞書がないと、ないない尽くしをかこつ先生の中で、わたしは二人のすばらしい先生にめぐりあった。インドネシアのチャンドラ氏とタイ国チェンマイの望月牧師とである。チャンドラ氏は、独力で数冊の教科書を作っていた。自作ということがすでにたいへんな仕事であるのに、氏は活字がないため、古い雑誌や教科書から、丹念に文字を切り抜き、台紙にはって写真にとって、完成されたという。他人だのみやあきらめが氏にはなかった。参観した授業も実によかった。望月牧師は布教の一環として、日本語教育をつづけていられた。市民の希望に献身的に応えて、数クラスの運営に心を砕かれた。新しい会館には日本語教室も完備していた。街にも牧師を敬愛する人びとがあふれていた。チェンマイ大学で昨春から日本語講座が正式に始められたが、実に牧師の長年の講師活動のたまものである。望月牧師が同志社大学出身と聞いて、わたしの胸は一層大きくふくらんだ。

お二人とも語学専攻の人ではなかったが、すぐれた日本語教師として、いまもなつかしく想い出す人である。

(大学文学部教授・言語学)

思い出の飛行機

木 枝 燦

記憶を遠い昔にたどっていくと、果は茫とした霞の中に消え去ってしまふ。うらうらに春の日の照る狭い裏庭に自分がしゃがんでいる姿が見える。傍に荒壁の便所が独立して建っていて、そこはかとなくアンモニアの臭いが漂っている。そこいらにははこべが生えていて、これは祖父が小鳥の餌に刻みこむために抜かないでおくのである。はこべは可憐な白い花をつけている。その花をじっと見ている、それから台所にはいると、あたりは一瞬まっくらになる。そこにはおとなの女ばかりが四、五人いるらしい。

「こわいなあ」という声ばかりが聞こえる。みんながてんでにこわい、こわいという。自分にはまだこわいということがよく分からぬ。一人が立って来て新聞の写真を見せる。何人かの男女が写っているが、端っこ一人が幽霊なのだと教える。自分はよく分からぬままそうかと思つた。これが幽霊との最初の出会いである。

やはりその頃祖父に連れられて飛行船を見に行った。何でも祇園さんの方であつたと覚えていた。思つたよりはるかに小さな飛行船が民家の屋根の上に低く浮かんでいて、水兵が屋根の上で綱を引っぱっている。もっと大きいものと聞いていたので、子供心に大いに落胆した。祖父は時々いい加減なことを言うので、ある

いはこの飛行船は気球であつたかも知れない。また当時海軍は潜水艦作戦用の小型飛行船をもつていたから、それであつたのかも知れない。

その帰り道八坂神社の境内を大勢の人と共に歩いた。小店が沢山出ている。一人の男が玩具の飛行機を売っている。ブリキ製の飛行機が張った糸に沿って行ったり来たりする。男は巧みに糸をしごく。この小さな飛行機が欲しかったが、祖父はお前にはできぬといつてどうしても買ってくれなかつた。これが飛行機との最初の出会いである。奇妙に思うのだが、この幽霊と飛行機の思い出はしばしば連合して頭に浮かんでくるのである。

人間が空を飛ぶということを意識の次元に思い描いたのは先史時代に遡り、多くの民族の神話や伝承の中にもうかがわれる。気球や飛行船と違つて、空気よりも重い機体を操縦して飛ぶことに最初に成功したのはウイルバーとオービルのライト兄弟で、一九〇三(明治三六)年二月一七日のことであつた。その成功の原因は、これを商品として売って金もうけをしたいという明確な目標があつたこと、千回に及ぶ滑空試験を行なつたこと、簡単な風胴を使って翼型(翼の長手方向に垂直に切つた切り口)の性能テストを行なつたこと、重い蒸気機関の代りに軽いガソリン発動機を

採用したことにある。

日本で最初の飛行はそれより七年遅れて徳川、日野兩大尉により代々木練兵場において成功した。以降軍民を問わず国産機の設計、製作、飛行が多く先駆的努力の下に行なわれ、成功例も多いが、基礎的研究と総合的施策の欠如が諸外国での進歩に遅れをとる原因となった。

第一次大戦の勃発と共に関係各国は軍用機の性能向上を競い、それをもって華々しい空中戦を展開し、次々に空のエースが誕生した。それまでは事故によって血ぬられた飛行機が、この戦争によってさらに凄惨な血で彩られたことになる。幽霊も飛行機も足が地につかぬ点と、ロマンチックさと悲惨さの両面をもつ点で似たところがある。

第一次大戦の後、軍用機が多数民間に払い下げられてスポーツ的な要素が次第に薄れ、郵便飛行や旅客輸送といった実生活に役立つ段階に生長すると共に、国際的な連絡飛行が次々と成功するに至った。私の記憶には朝日新聞社の訪欧飛行が鮮やかに残っている。一九二五（大正一四）年七月二五日、ブレゲー一九型「初風、東風」二機が代々木を出発し、シベリアを飛んで一カ月後にモスクワ着、そのあとパリ、ロンドンを経てローマに到着したのが一月二七日であった。一七四〇〇kmを二二八時間二一分、平均時速一五〇kmである。当時私は四才であったが、愛機を前にした四人の塔乗者の写真が強い印象を与え、その雄図を讀める歌が日本中で歌われ、その後永く覚えていた。私の覚えた最初の歌ではないかと思う。その頃富山県の東岩瀬という田舎に住んでいたが、J O A Kの放送がすで行なわれていたので、この歌は津々

浦々にひろがったのであろう。今見るとこのフランス製のブレゲー一九型はかなり近代的な様相の飛行機である。

リンドバーグが大西洋横断飛行をなし遂げたのは私の六才の時であるが、これについての記憶は全くない。その時は奈良市内の小学校の一年生であったが、毎日学校へ行くのが苦痛であった。その学校は実験的な教育法を目指していて、自由にいろんなことができる時間があつた。厚紙をたがねで丸く打ち抜いて硬貨を作り、売り買いの真似をするのが算術であつた。級友とやりとりするのが下手で、そのため算術嫌い、ひいては学校嫌いとなつてしまつたのである。

一年東組の教室の横に砂場があつて、その横の床の下にこわれた電気機関車の模型がころがっていた。これは精巧なもので、裏返すときちんと巻かれたモータの巻線や歯車が見えた。恐らく過去に父兄が寄付したドイツ製のものであつたと思う。教室中を捜してもレールはなかつた。こわれているに違いないが、こんな高級な物を床の下に放っておく先生も、それに注目する生徒がいならしいことも、実に不可解であつた。自由時間を利用して時々それに触りに行つた。そうすることが学校に行く値打ちと思えた。二年生になって教室を変つてからも時々覗きに行つた。

ある時学校から機関区を見学に行つてC10型の蒸気機関車を見せられた。ピストンとかロッドとかいふ言葉覚えてからSLに熱をあげだした。毎日のようにSLの画を描くこと、それも幾何学的に描くことに没頭した。半紙を貰つて一日に一輛ずついねいに描く。何日かで半紙がいばいになると、また新しい半紙を貰つて全く同じようなものを描いた。床の下の模型はいつの間にか

忘れてしまった。きつちりした画を描くために少年倶楽部という雑誌を参考にしたことがある。その頃大阪港に「日進、春日」という軍艦がやって来た。当時は練習艦になっていたと思うが、父に連れられてそれを見に行った。少年倶楽部には軍艦の画が沢山でて、その頃からSLは忘れてしまつて、興味が軍艦に移つた。

この雑誌は不思議な雑誌で、正月号などには実に豪華な付録がついた。十二月中旬になると組み立てられた付録が書店の店頭に飾られた。軍艦三笠であつたこともあり、ドルニエDO-X飛行艇(ドックス号といつていた)であつたこともあり、空飛ぶ軍艦のようなものであつたこともある。部厚い紙にすぐ切り取れるようにパーツが美しく印刷されていて、それらを組み合わせて作り上げるのであるが、子供には難しくて満足するようにはできなかった。向いの家にT君、Eちゃん、J君という子供がいて、揃つて可愛らしく勉強もよく出来た。T君はDO-X号を見事に作り上げた。そのため大いに劣等感を抱いた。T君は一年下であつたのである。主翼の上にはずらりとエ六つのエンジンユニットが並んでいる。一つのユニットには串型に発動機が二台ついている。四枚羽根のプロペラが一二个並んだ飛行艇は美しかった。それが飛んでいる写真でボーデンゼーという湖の名前も覚えた。DO-X号が乗員乗客一六〇人と密航者九人を乗せ、ボーデン湖でデモ飛行を行なつたのは一九二九(昭和四)年一〇月のことであつた。

当時住んでいた家では戸戸の外に便所があつて、そこからT君の家の台所がよく見えた。ある深夜、用足しにでた母がふとその方を見ると、台所には電燈がついていて、子供が一人格子にぶら下がるようにして内部を覗きこんでいる。母は今ごろJちゃんは何をして

しているのかしらと不審に思いながらも、それ以上は何とも思はず戸戸を閉めて寝てしまつた。丁度その頃Jちゃんはジフテリアで死んでいたのである。母はそれを秘していたが、後日語つてくれた時にもまっさおな顔をした。Jちゃんは四つぐらいの可愛い男の子で、近所の誰からも可愛がられていた。T君の家は転勤でよそに移つて行つたが、後年大学の一年下のクラスに入つて来た同君と再会した。この信じ難い話をした時、彼はちよつと嚴肅な顔をしてうなづき、Jは死に切れなかつたのだな、誤診だつたのだから、と言つた。DO-X号とJちゃんも、常に記憶の中で結びついている。それ以来、夜風呂屋へ行くのが恐かつた。その格子を一定時間見ない訳にはいかなかつたからである。

この頃から興味を中心に飛行機に定着して来た。その小学校では十時からラジオ体操をして、その後ドッジボールをする時間があつた。算術同様体操も苦手であつたので、すぐボールを当てられて枠外へ去る。同じような子にH君がいて、いつも二人で枠外でぼんやりしていた。ボールを持たせても敵によう当てないから、誰もボールを投げしてくれないのである。ぼんやりしていると、西の方からかすかに爆音が響いてくる。期待に胸をふくらませて待っていると、日本航空輸送会社のフォッカー「スーパーユニバーサル」旅客機が見えてきて、北の空佐紀、佐保の丘陵の上あたりをゆっくりと東へ向つて飛んでいく。高度は一〇〇〇mもなかつたであろう。木津川が航空路の目じるしであつたのだと思う。H君は両手を目の前に上げて、パンパンと射撃の真似をする。飛行機は眠たげな爆音を響かせて悠々と飛んでいく。ドッジボールの終りを告げるベルが鳴つてもまだ音だけ聞こえていることも

あった。何しろ新幹線列車より遅い飛行機なのである。調べてみると、この飛行機が使われたのは一九二九（昭和四）年以降のことである。なおこのユニバーサルをユニサバルと覚えてしまつて、中学でこの単語に出会うまで気が付かなかつた。

H君のお父さんは水道工事の請負業をしていた。家に遊びに行くと、事務所の横に何機かの模型飛行機が置いてあつて、お父さんが新しいのを作っている。町の中に監獄あとの広い空地があつて、そこで飛ばすのである。何人かのおとなが模型飛行機を飛ばしていた。まだのん気な時代であつた。助手の若い男が胴体の後部を両手で持つと、お父さんはプロペラの先にワインダをつけてプロペラごとゴムを胴体の中から引つ張り出す。ルブリカントを塗つて光っているゴムがぞろぞろと出てくる。ワインダでゴムを巻きながら、そろそろとプロペラを胴体に近づけていく。巻き終ると広場の隅から飛ばすのである。そこには天理教の教会があつて、太鼓をたたきながら「てんりおうのみこと」とうたつていく。その音の中でH君のお父さんは念ずるようにして飛行機をしばらく構え、それからすつと手放す。ゴムを一ぱいに巻いた飛行機は一直線に上昇して広場を飛び出し、夕焼雲を背景にどんどん小さくなっていく。助手が必死の面持ちで自転車を追いかけていく。お父さんは小手をかざして眺めている。そのようなH君のお父さんがとつともなく偉い人と思えた。しかしH君自身は模型飛行機には全く興味を示さない。思うに母親が親父殿の道楽に晝晩注文をつけるのを聞いていたからかも知れない。

リンドバーグがアン夫人と共に北米大陸を横断し、北太平洋を飛びながら霞ヶ浦にやつて来たのは一九三一（昭和六）年八月で

あった。写真で見たロッキードシリウスという機体が好きでたまらなくなった。実は水陸交代機であるが、写真はフロート（浮舟）を二つつけた美しい低翼の単発水上機である。五年生になつたので早速工事場から木ぎれを拾つてきて、その飛行機模型を作つた。（これは飛ばない。飛ぶのは模型飛行機である。）もちろん縮尺も何もない、いい加減な代物である。丁度物置きを改造して風呂場が出来ていたので、そこで浮かべて見た。案に相違してフロートでは浮かばず、翼の所までどっぷりつかつてしまう。この時の落胆はひどかつた。風呂場には電燈がなく、夜はロソクを立てていたが、その薄赤い光の中で何度もやつてみた。しかし物の道理でフロートだけで浮く筈はなかつた。仕方なく手に持つて、ロソクの光で壁に写る影の飛行で満足する以外救いはなかつた。この遊びは算術のできない理由の一つとして大変叱られた。しかし今もってシリウス水上機は大好きである。

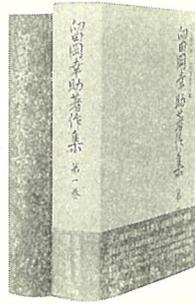
後年少年用の本でこの時のアン夫人の旅行記の一部の翻訳を読み、この紀行が優れたものであることを知つた。その中に、寢室？に着水した時、迎えのポートが霧の中からゆっくり現われてくる描写がある。「ポートの三人男よろしく……」という言葉があつて頭の片隅にひつかかつていた。先日本屋の店先に、「ポートの三人男」という文庫本が出ていて、ああこれかと四十数年経つてやつと判明した。つい買わずにしまったが、アン夫人の紀行の方は読みたい本の一つである。チャールズとアンが福岡から南京に向つて離水したのはこの年の九月一九日、その前日柳条溝の轟音一発、満州事変が勃発していたのである。

（大学工学部教授・流体力学）

サナプチの教育

——『留岡幸助著作集』の発刊によせる——

生 島 吉 造



の一人、留岡幸助の生涯、思想と行動が、いまここに再び世に問われようとしている。彼は社会事業家にとどまらない。文筆家であり、教育者でもあった。

サナプチの教育

いつか、名寄に行ったとき、遠軽のサナプチにある家庭学校の教育農場を訪れたことがあった。榆、樅、榎の樹木が生い茂り、熊笹が大地をおおっている面積千ha。「自然は人間をよりよく教育する」とは、留岡に多くの影響を与えたベスタロッチのことばであるが、サナプチの教育には、人間が人間を教育するという傲

慢さが、いささかもない。開墾当初、先人たちはいくたの迫害と困難のなか、信仰の土台の上に学校の柱をたてた。この学校創設にあたり、至難中の難事は、その開墾のことも、資本のこともなく、むしろこの教育に打ちこむ教職員の精神的開発のことであったと聞く。土地の開拓と人心の開発が不可分の関係にあったといえよう。まことに「土地は人を化し、人は土地を化す」ものである。

それにしても、同志社退学を余儀なくされた品川義介を抜擢して家庭学校の教育主任という任務を托した留岡幸助の度量の広さは、サナプチの原野のように大きい。遠軽の代表樹は紅葉と樺と樺だとされている。「紅葉はもゆる赤心、樺はけだかく高尚を、樺は堅実にして恒久性」を象徴しているが、これら代表樹はここに学ぶ青少年に深い啓示を与えている。

一路到白頭

かつて牧野英一はこの地を訪れ、「からす麦うえて育ててわれ

もまた北見おほ野の民たるべきか」と歌っている。からす麦うえて育てるここの教育の原点は、「よく働かせ、よく食わせ、よく眠らせる」三原則である。同志社在学中、安部磯雄がチャペルで聞いた「三人の名医」(Dr. Food, Dr. Sleep, Dr. Exercise)を、留岡はすでに家庭学校の校医として招いていることは興味のあるところである。石井十次もまた少年を遇するに満腹主義をもつてしたが、達人の見るところに共通したものがある。

「勤労は人の務むべき必要条件にして、これなくしては人類は幸福なる能わず。人の良心における進歩発達は勤労なくしては能わず」とは留岡の所見であるが、徒らに良心主義を標榜するものにとって、心にするどく残ることばだと思ふ。

このサナプチの教育に徹するために、留岡は、「一路、白頭に到る」執念をもつて終始した。This one thing, I do—これは彼の生涯の標語でもあった。

「手紙を書く人」

品川義介、二十六歳、家庭学校教育主任としてサナプチに赴任したとき、留岡より教えられたことの一つは、「実社会に立つて事をなそうと思つたなら、手紙を書くことを忘れてはいかんよ。僕は毎日、手紙や葉書を、少くとも、一日に十数枚書いている」と。留岡幸助自身も実に手紙と葉書を書いた人だった。さらに彼は筆の人であり、評論家であり、警世家でもあった。「留岡幸助著作集」第一巻を手にして、その感がさらに深い。とくに『基督

教新聞』主筆時代の精力的な活動には、いまさら、目を見るものがある。

「葉書をよく書く人」として思い出すのは留岡のふる里、岡山県高梁へ夏期伝道に行ったときの吉田清太郎の故事であろう。頑固に信仰を拒んでいた留岡の父宛に、吉田は日に葉書三、四枚を、祈つては書き、書いては祈りつつ「留岡金助殿」宛に通信したという。

さすが、東京家庭学校校長を継いだ牧野虎次もよく「葉書を書く人」であった。いつも太い万年筆と葉書をポケットにおさめて、寸時を惜んで葉書を書いた。ときにはチャペルの総長の椅子で、または会議の半ばでもペンを走らせた先生の面影がいまも残っている。同志社の社会福祉の流れをくむ一人、中村遙もまたその足跡にしたがつて、よく「葉書を書いた人」だった。

「文官銭を要せず」

この「著作集」におさめられている数多い留岡執筆になる論文中、肝に銘じ再度読みかえした小論は、宋臣岳飛のことば、「銭を要せず死を怖れず」と題するものであった。「文官銭を愛せず、武臣死を惜しまざれば、則ち天下平らかなり」とある。これは、ひとり教育、伝道にたずさわる人物だけではない。

さて私の老朋友、欧陽可亮はいま東京・三鷹にある春秋学院で教育に当たっている甲骨文字の学者である。日中戦争時代いらい三十有五年來の交友関係がつづいてはいるが、戦時中、燈火管制下の

上海の旧共同租界の寓居で、暗い電燈のともしびを囲んで、両国の将来を論じたことがあった。質素な綿服をまとった白面の欧青年は、意気軒昂と、戦後は新疆、青海の西北地方の開発に当るのだと語ったとき、私は心の中で、秘かに日中戦争の将来はすでに決したと直感した。

この欧陽先生と戦後、日本で再会したとき、私に贈られた一枚



の色紙には、この岳飛のことは、「不怕死 不愛錢」（死をおそれず、錢を愛せず）の六字であった。近代の中国革命家の心は、また社会福祉の道を拓いた留岡幸助の志でもあった。壮図を抱く人の心は、時代と国境を越えて相通するものだろうかと考えている。

（元同志社理事）

（大塚節治著）『回顧七十七年』

B 6 判六、〇〇〇円

大塚節治先生回顧録刊行会発行

（取扱・同朋舎、校友会）

（生島吉造・松井全共編）『同志社歳時記』

B 6 判六〇〇円

同志社大学出版部発行

（取扱・同志社取益事業課・校友会）

（生島吉造・松井全共編）

『続・同志社歳時記』

B 6 判七〇〇円

同志社大学出版部発行

（取扱・同志社取益事業課・校友会）

（同志社校友会編）

『同志社校友会名簿—昭和五十二年度版』

B 5 判一〇、〇〇〇円

同志社校友会発行

（取扱・校友会本部・各支部）

（住谷悦治校閲、青山霞村原著、田村敬男編集）

『改訂増補山本覚馬伝』

B 6 判二、〇〇〇円

社会福祉法人京都ライトハウス